聞名仏教

第 177 号 毎月発行
(発行日) 2025 年 6 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

自力をふりすてる

佐々木蓮磨

改悔文は「雑行雑修自力

のこころをふりすてて」とあります。このことばを無関心に読んでおれば、別問題になりませんが、少し自分の身に引き寄せて読みますと、なかなかひっかかって困るのです。それは「ふりすてる」ということばに無理なしに受けて行けないからであります。

むかし、同行がこの「ふりすてて」という言葉にひっかかって長年聴聞したのですが、どうもスッキリしないので、あるとき一蓮院講師におたずねすると、師は別に説明をなさらずに、「ご自分の袖をふって見せ」フリステルとはこれじゃ」と示されたのであります。

だが、この同行は、そのおこころが分かりかねて、しばらく茫然としていて、師が重ねておっしゃるには、「袖にゴミがついておれば、

払いおとすであろう。払いおとすときの気持は、ゴミ

に心のこりはさらさない。それと同じで、如来の本願のおこころを聞いてみると、雑行雑修自力というものに、何らの心のこりもなくなる。これがフリステルというところである」と仰せられたそうであります。なんとという平易で、しかも真を穿つたご教示でありましょうか。

自力で捨てようとかかって、捨てられるものではありません。捨てようとする心が、すでに自力の計らいでありますから永久に捨てることはできないのであります。そこで、「よく聞け」と教えて下さるのです。真宗の他力の信というものは、法を聞いてからおこすものではないのです。法が信をおこすのです。「法が信をおこす」と言っても、まだ不

徹底な感じがします。本当

のところを申せば法が信なのです。

法というものはノリと申しまして、なんとしても変ることのないまことの法則であります。この法則をよく聞いてみると、疑おうとしても疑うことができず、信ぜずにおこうと思っても信ぜずにおくことができな

いのです。これを金剛堅固の信と申すのでありましよう。

今の「自力の心をふりすてる」ということでも、法の道理を聞いてみれば、今まで自力を捨てねばならぬと思っておったところ、捨てる自力もないことになつてしまふのです。そうなる

と、自力を捨てるとか、捨てないとかいうことは、問題になりません。ここにおいて、全く自力というものに心がかからぬことになるところが、「フリステル」ということでありましよう。

捨てる自力もないということは、すべてが他力ということであります。清沢満之師は「自力も他力

のお与え」と言われましたが、これ即ちすべてが他力ということでありましよう。大体自力というものは本来ないものであります。永い間の悪い癖で、自分というものが頭をあげ、自分の動く力や、計らう心を自力と考え込んできたのであります。真実の法を聞いてみると、自力の働く力も計らう心も、我ならざる力によつて動かされている事実が明確になりますから、その明らかな事実——真実の前にはウソの自力執心は別に捨てようとしなくても、おのずから消え去つてしまふのであります。法を聞くというは、自分そのものすべてが大法に左右されている存在であったと目が醒め、ここに大法のままに、力強く生きて行く生活が開されるのでましよう。

清沢満之先生に学ぶ ④

以下は『清沢満之の言葉』

(永田文昌堂、二〇一三年)の中の言葉を引用し、講述したものです。清沢満之先生(1863 - 1903)はこの中で次のようにいっています。

自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾に此の現前の境遇に落在せるもの、即ち是なり。

清沢先生は明治時代が始まる五年前名古屋で生まれ、東京大学で西洋哲学を学び、その後大谷派の僧侶になり、結核を患いながら真宗信心の確立に全力を尽くして四十一才でなくなりました。先生の求道は「仏とは何か」とか「浄土とは何か」とか「さとりととは何か」と問うのではなく「本当の自己とは何か」を問うたのでした。この非常に現代的な課題を背負って真宗を尋ねていった高僧です。仏教史の中で、

「さとり」を求め、「浄土」

を求め、「仏」を求めて求道した仏教者は大勢いましたが、一番身近な「自己とは何か」という、時代を超え、地域を越え、民族を越えた普遍的な問いをもつて道を求めた人は寡聞ながら外に知りません。

この課題は、宗教を考える点で非常に大事な事柄です。現代、「私は神も仏も信じません」とか「私に宗教は必要ありません」といつて、宗教を敬遠する人が少なくありません。特に日本はそういう傾向が強いです。しかし、神を否定し仏を否定し宗教を関係ないと無視することはできません。「あなたは何ものですか」「あなたは結局何なのですか」「あなたは一体に何に依って存在しているのですか」という問いに対して、「私はそんな問題に関係ありません」といつて、この問題と

せん」といつている、「そのあなたは一体何ものなのですか」という問いはまぬがれない問いです。

「私」というものを考えてみれば、そんなに自明なものではありません。今まで「自分とは何か」が分からないままに生きてき、そのような問いを問うたことがなかったにしても、こういう問題を意識しなくても抱えているのが人間です。この問題について昔、ギリシャの哲学者であるソクラテスは「汝自身を知れ」を自分の問題にしました。そしてアテネの若者たちにこの問題をつきつめていった、そこから西洋哲学が始まったと、若い頃教わりました。

まで終わってしまうことになりかねません。そして「私にそういう問題があってもとても解決はできない」とあきらめたり、「そういう問題があっても私は別に困らないからこのままでよい」といつて問題の解決を求めないのが普通になっていいますが、しかし本当の自己を知らないということは、本当の自己ではないものを自己にして、それに振り回されたり、束縛されたり、不安だらけのまま生きてざるを得なくなってしまう。あるいは仮の自己しか知りませんからのちの芯が空虚になってしまいます。では仮の自己とは何かといえば、それは自我であり、自我の思いです。自我が私の人生の主人公になってしまふのです。

さて、清沢先生は「自己とは何ぞや」という問いにどう答えたのでしょうか。それがさきほどの「自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾に此の現前の境遇に落在せる

もの、即ち是なり」でした。この言葉は先生が単に頭で考えて思いついたというようなものではなく、結核で血を吐き、長男と奥さんが先に亡くなるというような厳しい現実生活の中で、聞法求道し、悪戦苦闘して発見した「真実の自己」の相(すがた)でした。ではこの言葉を領解した範囲で述べてみます。

まず「自己とは」と、清沢先生は今ここにいる「何者」かについて問うのです。そしてこの何ものかは「絶対無限の不思議ないのちのはたらきによって成立し、現前の境遇である今ここにそのつど人間の側の一切の行為に先だつて、今ここに、そのつど絶対無限のはたらきによって存在せしめられている一個の物である」といわれるのです。絶対無限すなわち寿命無量の阿弥陀仏のはたらきによって、私一切の計らい、あれやこれやの思いに先立って、一瞬一瞬今ここに置かれている存在、これがまことの自

己だといふのです。

絶対無限とか寿命無量と
いうと、私たちの現実とか
けはなれたもののように思
います。絶対無限は、無数の
はたらきとしてはたらいて
いる一切の諸物・諸作用の
ほかにはありません。

これは実に身近なはたら
きでもあります。たとえば、
大きなもので言えば空気の
はたらき、食べ物のはたら
き、太陽のはたらき、大地
(地球)のはたらき、宇宙

の空間などがあります。小
さな物では衣服や家や机や、
その他さまざまな物、もし
て身体では胃や腸や心臓や
肺臓や、血管や血液、耳や
目の働き、そして脳の働き、
こうしてあげればきりがあ
りません。そしてもっと身
近には意識・心のはたらき
も不思議なはたらきです。
しかもこれら一切は孤立し
たはたらきではなく他との
関係の中ではたらいている
のです。諸物は互いに関係
しながらはたらいています
が、そのはたらきを可能な
らしめている統合的なはた

らきが「絶対無限の妙用」
です。万物はバラバラでは
なく一体的な関係性として
はたらいている力、それを
一言でいえば「絶対無限の
妙用」であり「はかりない
いのちのはたらき(寿命無
量)」です。寿命無量のこと
をインドの言葉(梵語)で
はアミターアーユスとい
います。アミタは無量・無限、
アーユスは寿命の意味で、
寿命無量のことをアミター
アーユス、これを漢訳した
言葉が「阿弥陀仏」です。

ですから阿弥陀仏は寿命
無量であり、この阿弥陀仏
によって私は今ここに一瞬
一瞬存在せしめられている
のです。このはたらきの上
に善悪・正邪・禍福・苦楽
・悲喜などの価値の領域が
あるのであって、この正邪
善悪に先立って存在してい
る事実があるのです。禍福
も不幸もこの事実の上の
ことです。この事実そのも
のには正邪・善悪・禍福は
断たれて、正邪善悪はあり
ません。しかし、この事実
において生きている人がこ

の事実に対して、どう受け
取っているか、どう生きる
か、どうふるまうかに正邪
・善悪・苦楽・禍福が出て
くるのです。

ですから真実の自己とは、
はかりない阿弥陀仏のいの
ちが今ここに存在しはたら
きつつあるそのいのちの現
れとしての諸物のはたらき
によって存在しているもの、
それが自己ともいえるでし
よう。つまり阿弥陀仏の現
在における一限定が自己と
いえるでしょう。私たちは
このはたらきを離れて一瞬
も生きることはできません。

この自己は分別的な知性
(自我)でつかまえること
はできません。むしろ何か
をつかみつつあるそのもの
でありましょう。これは決
して難しいものでもなく複
雑なものではありません。
極めて身近で、本来だれで
もがこのはたらきにいつで
もどこでも今ふれることが
できるのです。

普通、私たちが「私」と
いい「自分」といい、「自己」
と言っているのは自我のこ

とです。自我は本当の自己
の一部のはたらきです。一
部であるのに、これが自分
自身だと思っているのが私
たちです。はかりなきいの
ちの本来の自己の中の判
断し選択し決定する機能が
自我です。この自我の思い
や考えが自分の全体のように
に思う。それで自我中心の
生き方になってしまふので
す。善い悪い、良い悪い、
きれい汚い、好き嫌い、勝
った負けた、損した得した、
などなどのめいめいの自己
中心の自分の思いに重心を
置き、自分の都合の善し悪
しで判断して、思い煩いの
生活を送る、それが凡夫の
生活であり、私たちの現実
の姿になっています。

しかし、思い煩っている
私は自分の「思い」によつ
て生きているのではなく、
思い煩う自分の思いに関係
なく、太陽や水や空気や大
地や心臓や胃腸や血液など
数えあげればきりがなほ
どの、自我ではないさまざま
まなはたらきによって今こ
こに生きています。こ
ういう無数のはたらきを成

立せしめている大いなるい
のちのはたらきを「絶対無
限の妙用」といふのです。
この妙用こそが生きている
基盤であって、この基盤を
忘れてしまっているのが凡
夫です。その凡夫に全人生
の基盤、本当の自己を知ら
せる教えが仏教なのです。

この無量寿如来は、自我
の思い一杯で生き、不安と
思い煩いの中に閉塞されて
困窮している私たちに、「我
に帰せよ」「我をたのめ」「我
にまかせよ」と仰せくださ
っているのです。それが正
信偈の初めの「帰命無量寿
如来」の一句です。この意
味は「帰せよと命おませくださ
る無量寿如来」という意味
です。

「帰せよ」の「帰」につ
いて親鸞聖人は「よりかか
るなり」「よりのむなり」
と注をほどこしておられま
す。そして帰命は「帰せよ
の命」ですから、「帰命」は
「よりかかれ」「よりのめ」
の仰せ(命令)になります。
凡夫の人生は死に取り囲
まれ、死に圧迫されている

信仰夜話

人生というので仏教では「苦の人生」といっています。苦はインドの梵語で「ドゥツカ」といい、圧迫されているという意味です。この束縛から脱出したいのが私たちの根本的な願いで、それを「生死を超える」問題といえます。老病死の不安に押さえ込まれているのですが、しかしながら自分の力でそこから出ることができないのです。そういう私たちに「汝のその問題を我にまかせよ」との仰せくささり、「そのまま念仏するばかりで助け出す」の阿弥陀仏の仰せが南無阿弥陀仏です。この南無阿弥陀仏を称え、南無阿弥陀仏の大慈大悲の仰せに驚いて、仰せに従うとき、はからずもはかりないのちに触れるのです。そしてはかりないのちに於いてある自己を知るのです。この自己は生死を超えている自己です。ほのかながらもこの自己を知るのがいただいた信心の智慧です。

(了)

問「親鸞聖人はご消息に（如来の誓願には義なきを義とすとは、大師聖人の仰せに候いき。このころのほかに往生に在るべきこと候わず）と仰せられています。よくわかりません。どういうおこころですか」

答「ここで如来の誓願というのは第十八願・念仏往生の願のことです。聖人はご消息の中で（弥陀の本願と申すは、名号をとえんものをば極樂へ迎えんと誓わせたまいたる）と仰せになつて願です。要するに（十声なりとも一声なりとも称えるばかりで浄土に生まれさせる、タスケル）という大悲の誓いです。この誓いを信じるについては（義なきを義とする）のであるといわれるのです。なぜそういうことを仰せられるかというと、口で（南無阿弥陀仏を称えるだけで浄土に生まれさせる）という誓願

はあまりにも単純すぎ、あまりにも易（やす）すぎ、あまりにも簡単すぎて信じられない、ということになり、ああでもなかるうかこうでもなかるうかと思案し、この誓願の救いの意味を分かつて信じようとか、受け入れようとか、自分に納得させようと計らうのです。いわゆる「そのままなりでタスケル」というこの仰せに対して、「このまま助かるのですね」と自分の方に持ち替える姿です。阿弥陀仏の仰せを自分の胸にいったん引き下ろして受け取ろうとするのです。それはやはり「確認しよう」「了解しよう」とするはからいであつて、「義なき」の義といわれるものです。でもこの念仏往生の誓願は「誓願不思議」といわれ、人間の思案や考えで納得できるといふ事実ではありません。ただ単純に有難い不思議な事実であり、その不思議な有難い事実から現れたのが念仏往生の願の御言葉です。それは阿弥陀仏の

大悲のいのちの不思議であり、人の世の初めから定ま

つている有難い恵みの事実です。そこで聖人は「不思議な誓願をただ不思議と信ぜよ」と仰せられ、はからい（義）を離れて、そのまま「ああありがたい、不思議なお助けであることよ」と受け取りなさいとのおすすめなのです。そういう不思議な誓願を不思議と受け取る、つまり（義をさしはさまずに受けとるのを正しい受け取り方（義）である）といわれるのです。ではそういう私の思案・分別を離れてこの誓願を受け入れることがどうしたらできるのですか、ということですが、それはそれこそ自分の計らいでできません。

聞法念仏していくと、まったく自分の救いの問題に對しては無知無能であるといふ私にどうしてもぶつかります。こうして「救われ難き我が身」と痛感するところ不思議にも「そのまま称えるばかりですべて引き受ける」という阿弥陀仏の驚くべき大悲の誓いをそのまま受け入れざるを得なくなるのです。

(了)

【住職雑感】

現在O先生から俱舎論の講義をZOMで受けている。この会に参加しているインド人のS先生に「インドで仏教が衰退しヒンドゥー教が盛んな理由の一つにヒンドゥー教には音楽や踊りがあるが、仏教は非常に少ない。だから一般民衆には仏教はなじめなかったのではないか」と質問したら、「たしかにその理由は大きい」といわれた。次に「インド音楽でキルワニというジャンルが特に好きで非常に美しいですが、キルワニという意味は？」と問うと「旋律という意味で、キルワニはことに宗教的な感情が豊かで美しい」とおっしゃった。ヒンドゥー教の「おつとめ」は非常に宗教的で美しい歌を歌うのが勤行になつているのがうらやましい。インドのシーク教のおつとめも非常にいい。近年、インドの聖者と

いわれたサイババが亡くなって火葬の時の動画を見たが、火葬中に流れたいわゆる「おつとめ」の歌が身にしみるものがあった。これほど火葬にふさわしい感情表現はないと思われた。話がかわるが、日本の音楽では津軽三味線などは音楽性が大変深いものがあるが、学校の音楽の時間で聴いたことは一度もなかった。教科書に載っている曲の多くは西洋音楽風の軽い曲だった。